

ある日妹が増えまして

暁英琉

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人で悲しいなら手を取ろう

家族がいらないなら家族になろう

それでも悲しいなら

お兄ちゃんは妹にとことん甘くなる

だからきつと新しい妹の生活はMAXコーヒーのように甘い

じゃあ、今いる妹は？

そんな新しい妹とかわいい妹のお話

■ 追記 ■

続編「<http://novel.syosetu.org/56500/>」

目次

案する	1
だから、比企谷八幡は家族になろうと提	
新しいお兄ちゃんは、限りなく無力だつ	
た	14
お兄ちゃんはお兄ちゃんであろうとする	
兄と妹の想いはすれ違う	26
末妹はその想いをひた隠す	37
だからお兄ちゃんはお兄ちゃんであいられ	
なくなる	63
きつと比企谷兄妹は間違っていない	

だから、比企谷八幡は家族になろうと提案する

幸福と不幸は紙一重である。片方が勝利という幸福を味わえばもう片方が敗北という不幸を味わうように、誰かが幸福になるということは誰かが不幸になることを意味する。

そして、その機会は等しく皆に与えられていて、逃れようとしてもきつと逃れることはできないのだ。しかし、人はそれを否定する。たとえテレビで事故のニュースが流れようと「かわいそう」と思いこそすれ、次は自分の番と思うことはない。その可能性をすべからず否定する。

家族や友人や知り合い、自分の周りにいる人間はきつと特別で、不幸なことなんて起こらないのだと都合よく解釈する。なぜならその方が楽だから、楽しいから。不幸にビクビクおびえる人生など無価値だから。

しかし、どんなに否定しようとする不幸のルーレットは回り続ける。結果が分かるまで、ルーレットの針がどこに止まったのか、俺達は知る由もない。

*
*
*

「ひどいもんね……」

珍しく出勤時間が遅めのお袋がテレビを見ながらポツリとつぶやく。テレビでは本業芸人の司会者が真面目な顔で事件の感想を言っている。

ハイジャック。

どうやらイギリスから羽田に向かうはずだった旅客機がハイジャックにあつたらしい。犯人が指定した目的地は天候の都合上非常に危険で、機長や警察などが説得を試みても冷静さを失った犯人は聞く耳を持たず、強行的に嵐の中を進ませた結果、墜落。海上に叩きつけられた旅客機はバラバラになってしまったらしい。ハイジャック犯を含めて多くの乗客乗務員が亡くなった。むしろ数名とはいえ生還者がいたのは奇跡だったと言えるだろう。

そのニュースに俺は痛ましいと感じながらも、それ以上の感情は湧いてこない。なぜなら結局自分には関係がないからだ。しかも、明らかな人災なのに旅客機の安全性がなだとの外れなことを言っている知識人（笑）を見ていると白けてくる。この事故も数年もしたら皆から忘れ去られて、思い出したように世界が仰天するようなニュースバラエティや、アンビリバーボーな番組で美談増し増しで取り上げられたりするのだろう。酷く吐き気がする。

「あ、お兄ちゃん。そろそろ行かないと遅れちゃうー！」

「……そうだな」

そして、俺自身もそうだ。中東で戦争が起こっても休日は何もなかったら過ぎすし、こんな事件が起こって、日本人が何人も死んでもいつものように学校に行く。けど、それが人間というやつだ。所詮は他人事、自分たちには蚊帳の外の出来事。

だから今日もただ自転車を走らせる。

* * *

学校も授業もいつも通り進む。たまに休み時間にニュースの話題が上がったりもするが、そもそも友達との楽しい会話に暗いニュースは好まれない。すぐにすり替えられ、淘汰される。それが普通なのだ。

そうしていつもと変わらない時間はいつもと変わらず過ぎていく。いつも通りベストプレイスで昼食を摂っているときに、ふと今日は一色に放課後生徒会の仕事を手伝ってほしいと頼まれていたことを思い出した。相変わらず責任だのなんだので脅してくるから断るに断れない。このままだと一生パシリとして使われそうで怖い。その役目はぜひとも戸部に押し付けたいところである。

どうでもいいことに思考を割いていると、遠くから予鈴の音が聞こえてくる。ハッ、一色と戸部のせいで天使の舞をあまり見れなかった。もう一年もしないうちに戸塚もテニス部を引退するのだから少しでも目に焼き付けていたいというのに。

気がつくと放課後になっていた。なにこれキンクリ？ あ、午後が数学と自習だったから寝てただけだわ。由比ヶ浜に一色の手伝いをしてくと断りを入れて生徒会室に向かう。

「うつつ……あれ？」

「ああ、比企谷か」

生徒会室の扉を開けるとそこにいたのは一色ではなく副会長だった。室内を見渡し、
ても一色の姿はない。

「あー、生徒会長に呼ばれてたのか。なんか今日は休みらしいぞ」

普段と違う状況に困惑していると、状況を察した副会長が説明してくれる。

「そうか……」

「いつも悪いね。今日は俺がやるから帰ってもらって構わないぞ」

「わかった」

軽く会話をして生徒会室を出た。

しかし、一色が休むなんて珍しい。人にちやほやされるために身に付けたのか、一色

の自己管理能力は結構高かったと思うのだが。まあ、予防してても引く時は引くのが風邪だからな。由比ヶ浜あたりは引かなそうだけど。

用事もなくなっただけで奉仕部に行ったらゆりゆり空間だった上にすごい白けた目に向けられた。俺部員のはずなのに酷くない？ 性の方向性の違いでやめるよ？ やめないけど、平塚先生怖い。

まあ、今日手伝うことがなかった分明日手伝わされるだろう。病み上がりな奴に無理させるわけにもいかないし、手伝ってやるか、などと考えながら本を取り出しいつものように読みだした。

しかし、次の日も、その次の日も、一色が学校に来ることはなかった。

* * *

おかしい……。

一色が休みだして一週間が経った。さすがに長引きすぎではないだろうか。時期的にインフルエンザか？ なんだかんだ一番接点のある後輩のことだ、多少不安になる。不安なせいで授業の内容もいまいち入ってこない。クソツ、全部一色のせいだ。文句の

一つでも言ってやりたい。

そこまで考えて、メールという手段があったことを思い出した。一色が俺をいつでもパシらせられるように（本人は否定したが）この間交換したのだ。このままではいつ生徒会の手伝いをすればいいのか悶々……戦々恐々しなくてはいけないし、いつ学校に来れるのか連絡をしてみてもいいだろう。

TO：一色いろは

件名：大丈夫か？

本文：だいぶ休み長引いてるみたいだけど大丈夫か？ インフル？

まあ、こんなもんで大丈夫だろう。「メールで体調の心配してもしかして口説いてるんですか〜ごめんなさい」などと帰ってくる可能性は無視だ無視。このままだと俺自身も予定も立てられないのだから仕方あるまい。立てる予定なんてないけど。

昼休みの頭に送ったメールは、昼休みが終わるまで返ってくることはなかった。

* * *

そのまま放課後になった。相変わらず一色から返信はないが、女子からの返信がないとか俺にとっては日常茶飯事なのでそこまで気にしない。風邪なら寝ていたとしても

不思議じゃないしな。いつものように奉仕部に行き、本を取り出す。

「今日も一色さんお休みなのね」

「そうみたいだな。長引いてるし、インフルとかじゃないのか？」

「心配だね……」

雪ノ下も由比ヶ浜も心配しているようだ。まあ、こいつらにとつてもかわいい後輩だからな。この部活一色に甘すぎではないですかね。

「インフルでも普通の風邪でも今の薬なら問題ないだろ。あいつが復活したらいつもどおり弄ってやれば……？」

ポケットでスマホのバイブが震えた。取り出してみると一色からのメールだ。ほら、ちよつと性質の悪い風邪引いてるだけ——

FROM：一色いろは

件名：Re：大丈夫か？

本文：せんぱい

ぞわりと、背筋が震えた。「せんぱい」。ただそれだけの単語が記載されただけのメールに言い知れぬ不安を感じたのだ。なにか異常が起こっている。そう思った時には身体は弾かれるように動きだしていた。後ろで雪ノ下や由比ヶ浜の声が聞こえるが構っている余裕はない。まっすぐに職員室へ向かう。

「平塚先生！」

入口近くの定位置には平塚先生が座っており、俺の突然の訪問に目を見開いている。

「どうしたんだ比企谷、そんな怖い顔をして」

俺はそんなに怖い顔をしているのだろうか。いや、今はそんなことは関係ない。

「先生、一色の家の場所、分かりますか？」

いくらある程度交流があるとはいえ生徒の個人情報だ。普通に考えて教えてくれるものではない。しかし、平塚先生は何かを察したように浅く息を吐くと、さらさらとメモ帳にペンを走らせて渡してきた。

「これが一色の家の住所だ。スマホの地図アプリで調べれば場所も出るだろう」

「ども」

メモを受け取ると即座に踵を返す。扉を閉めるすら面倒だった。

「比企谷、一色を受け止めてやれよ？」

先生が言った意味を考えることはなかった。思考を置いていき、身体だけは急げを俺を急かしていた。

一足飛びで廊下を駆け抜け、自転車を引きだし、ペダルに思いつきり力を込めた。

* * *

「はいか……」

地図アプリを終了する。目の前の一軒家には『一色』の表札。ここが一色宅で間違いないようだ。息を整えてインターホンを鳴らす。

……。

出ない。二回ほど鳴らしてみたが結果は同じだった。もう日も傾いて室内はだいぶ暗いはずだがどこにも電気は付いていない。ひよつとして、家にはいないのだろうか？ そう思いつつ試しにドアノブに手をかけてみると――。

「開いてる……」

少し考えて、玄関を開ける。光のない廊下は薄暗く、人の気配は感じさせなかった。

「一色……？」

俺の声に返答の声は返ってこない。田舎じゃあるまいし、鍵をかけないなんてことはないはずだ。寝ているのだろうか。いやしかし、俺が一色のメールを受け取ってから三十分と経っていない。それで熟睡するというのはそんなに風邪は酷いのだろうか。

そろりと家の中に入る。傍から見れば完全に不審者だが、緊急事態故いたしかたない。もし警察を呼ばれた時は一色に弁護してもらおう。玄関が開いていた理由は空き巣の可能性もある。警戒しつつ、ゆっくりと足を進めた。

おそらくリビングと思われる一番近い扉を開け、中を覗き――

「一色!?!」

ソファでぐったりしている一色を見つけて思わず駆け寄る。うつ伏せになった一色を抱き起こすと、熱はないがその顔色は真っ白だった。

「おい! 一色! しっかりしろ!」

「……あ、せんぱい……」

軽く身体をゆすると一色はうつすらと目を開ける。意識があることに少しほっとするが、その目は虚ろで焦点が合っていないかった。

「一体、なにが……」

改めて部屋を見渡して明らかにある異変。埃まみれのテーブル、散乱したカップ麺やお菓子のゴミ。これは果たして、女子校生が家族と住む家の状況だろうか。

「一色、家の人は……」

口にして、失敗したと気付いた。

「いえ……おとうさ……おか、さん……」

さつきまで表情のなかった一色の顔に悲壮、絶望、恐怖、あらゆる負の表情が混ざる。目には涙があふれ出し、小さな口からは嗚咽が漏れる。

「ひぐっ……ぐすっ……」

泣き出してしまった一色に俺ができることは、ただなにも言わず抱きしめてやることだけだった。

* * *

「すみませんでした……」

長い間止まらなかった嗚咽が止むと、一色はぼしよりと謝ってくる。

「気にすんなよ」

そう、気にしなくていいのだ。きっとこいつはずっと、今の感情を表に出せずにいたのだから。それは一重に一色のせいではなく、そんなときにそばに誰も居られなかったせいなのだから。

一色は俺に抱きついたまま、ぼつり、ぼつりと話してくれた。一色の両親はそこそこ大きな多国籍企業の社員で、二週間前からイギリスの支社に出張していたらしい。仕事熱心な人たちで一色にもたくさんの愛情を注いでくれていた。その幸せが永遠に続くと思っていた。けれどそれは幻想で、その幻想はあっけなく崩れ去った。

一週間前のハイジャック事件。一色の両親は運悪くその機に居合わせてしまった。数名の生還者の名前にその名はなく、帰ってきたのはしゃべらぬ骸だった。

「私、もう身内なんていないんです。おじいちゃんやおばあちゃんももう死んじゃってるし、親戚もいません。もう、頼れる人なんて……」

いつもはふてぶてしいくらいあざとく、悲しみなんて感情を持ち合わせていないのではないかと、うらやましいくらい明るい一色の背中は、少し触れば壊れてしまうくらい弱々しく、赤子のように小さかった。

この一週間、この少女はどれだけの虚無感を味わったのだろうか、どれだけ世界を呪ったのだろうか。一色いろはではない俺には、想像もできない。

「私、学校辞めなきゃいけないね。お父さんたちの蓄えがあるとは言っても、働かないと生活できませんし。そしたら、せんぱいとも、もう……」

しかし、想像もできないからと言って、俺にはこの小さな背中を逃がすことはできなかった。

「せ、せんぱい？」

一色の身体を強く抱く。一色と会えなくなるなんて俺には考えられなかった。そう思ってしまうほど、俺の中で一色いろはという存在は大きくなっていったのだ。

「俺に任せろ」

「え……？」

この存在を離すわけにはいかない。それがただの俺のわがままだったとしても、エゴ

だとしても。そう思うと、自然と口が動いていた。

「まだ生徒会長の任期が残っているのに、勝手に辞めたら許さねえぞ？ 責任、取らすんだろ？」

「そ、それは言いましたけど……今の私には学校に通い続ける財力なんて……」
「だから、任せろって言うてるだろ？」

一つ、考えがあつた。あまりにも突拍子もない、アホらしいと一蹴すらされそうな考え。それでも、可能性があるのなら形振り構つてはいられなかつた。

「ただ、これを実行する前にお前に聞かなきゃいけないことがある」
「なんですか……？」

ここで拒絶されたら終わり。きっと俺達の関係も終わる。そう考えると恐怖で震えあがりそうになる、弱い自分がやめると叫ぶ。けれど、それでも、俺は言葉を紡いだ

「一色……俺と、家族になってくれ」

新しいお兄ちゃんは、限りなく無力だった

「というわけで、一色いろは改め、比企谷いろはです！」

「は……？」

放課後の奉仕部部室が凍りついた。ていうか、凍りついたのにまだ室温が下がる……だと!? ギギギと一色に向けていた首を動かして雪ノ下と由比ヶ浜が俺を睨んでくる、超怖い。

「比企谷君、ついに通報しなくてはならないようね」

「ヒツキー、女の子脅すなんてサイテー」

「何お前から勘違いしてんの？」

雪ノ下はまじでその二ヶタまで入力した携帯をしまってください。冤罪でも人を社会的に殺すには十分なんですよ!? 痴漢冤罪怖くて電車乗るのにビクビクしている社会人もいると言うのに……。あと由比ヶ浜、脅して名字を自分のに変えさせるってどういうプレイだよ特殊すぎるわ。

「脅すだなんて人間きが悪いですよ。……ちゃんと合意の上なんですから」

「合意!?!」

「お前はちよつと黙つてろ」

トスつと一色の頭にチョップをかますと、「いたつ」とかわいらしい声を上げながら涙目上目遣いで睨んできた。明らかに演技なのによく涙目になれるな。一色、お前なら女優も夢じゃないぞ。レッドカーペットに乗れるまでである、嘘ない。

「痛いですよ、お兄ちゃん」

「お兄ちゃん!?!」

「まだ俺はお前の兄じゃねえぞ」

「まだ!?!」

なんか今日は二人のシンクロナ率高いっすね。今ならフュージョンもできそう。サイズ的にも頭的に丁度良くなるかも知れんな、どうでもいいや。というか、雪ノ下がかなりキヤラ崩壊起こしている気がするが、ツツコんだら余計ややこしいことになりそうだ。

「あー、とりあえず説明するから口挟まずに聞いてくれ」

心労がすでに限界に近いが、今後を円滑にするためにかんばって説明しよう。八幡、かんばれ♡かんばれ♡キツモ。

*
*
*

「お兄ちゃんおかえりー……っていろはさん!」

「こ、小町ちゃん、どうも……」

あの後、一色に最低限の荷物を用意してもらって比企谷家に帰ってくると、案の定小町に驚かれた。というか、お前らいつの間にか下の名前で呼び合うほど仲良くなつてたの？ クリスマスイベント？ 妹と後輩のコミュ力高すぎ！

「とりあえず一色、お前風呂入ってこい。小町にはその間に説明しとくから」

「はい、わかりました……」

奥の浴室に一色を案内して、小町とリビングに入る。二人分のコーヒーを用意して、一色の現状、そして俺の案を説明した。

「なんか、お兄ちゃんにしては大胆なこと考えたね」

「このままだと明日にでも退学届出しそうだったし、いやそれ以前に生きていけなさそうだったしな」

実際、あの状態の一色が一人で生きていけたとは思えなかった。そもそも、今日俺が無理やり行かなかつたら死んでいたのではないかとすら思える。だから、どうしても早急な判断を取らざるを得なかった。

「まあ、そのためには親父とお袋の説得なわけだ。小町、手伝ってくれるか？」

「もっちゃんだよ、お兄ちゃん！」

ほんと、協力的で良い妹を持ったもんだ。頭をポンポンと撫でてやる。まあただ、これは俺のわがままで。手伝ってもらおうとはいえ、最後は俺が説得しなくてはならんだろう。

全員食事とシャワーを済ませていると、お袋と親父が帰ってきた。いつもより早くて驚いたが、お母様、俺を見て即携帯取り出すのやめてくれませんか？俺あなたの息子ですよね？「あんたついに……」ってついに何だよ！息子信用しろよ！

「それで、あんたがこんな遅くに女の子を家に連れ込んでる理由はなに？」

ここからが本題だ。一色に同意は取ったが、ここで親父お袋の同意を取らなければ結局全てがおジャンなのだ。自分で考えておきながらいぶん綱渡りな作戦だ。作戦とも呼べない。

作戦とは呼べないから、正々堂々真正面から――

「一色を養子にしてください！」

土下座でお願いをするしかない。

二人とも状況を読みこめていない顔をしている。いきなり息子が後輩を養子に迎え入れるなんて言ってくるのだから当然だろう。しかし、今一色を繋ぎとめておくにはこの方法しか考え付かなかった。

一色が比企谷家の養子になれば、当然うちの親に養われることになるし、そうなれば学校を中退する必要もなくなる。それに、一人では生きていけないような状態の一色の様子を確認することもできるだろう。

しかし、この提案は両親にとってメリットがない。そもそも取引や駆け引きではなく、お願いをするしかないのだ。

「大学を卒業したら一色の学費は俺が絶対返します。自分の分も返します」

そこに少しでもベットできるカードがあるのなら、それを惜しみなく使う。絶対に、一色を離すわけにはいかない。

「だから……だから……」

「せんばい……」

両親は俺と一色を見比べ、互いに頷き合い、小さくため息をついた。

「いよいよ」

「え……」

「えってなによ、えって」

「いや……いいの、か……?」

あまりにあつさりと親が了承して完全に困惑していた。俺のこづかいなくすとかバイトでできる限り家計に貢献するとかいろいろカードを用意してただけに、あまりに

も拍子抜けだった。

「だって、ぎりぎりまで私たちの脛かじって生きるとか言ってたあんたがそこまで言うんなら、答えてあげないわけにはいかないでしょ」

呆れ顔のお袋とその後ろでうんうん頷いている親父。

「一色、いろはちゃんだっけ？」

「は、ひゃい！」

思わず緊張で声が裏返ってしまった一色にお袋は優しく笑いかける。母性って言うのはこういうもんなんだなと改めて理解した。

「養子縁組自体は少し先になるだろうけど、現時点であなたは事実上この家で家族です。学費も生活費も私たちが払うし、その点をいろはちゃんが気にすることはない。家では自由にしてくれて構わないし、八幡で遊んでも構わないわ」

「は……」

待つてくさいお母様。なんか俺で遊んでもいいとか言いませんでした？俺おもちやじゃないよ？さつき感じた母性消し飛んじやったよ？一色もまさか俺で遊んでいいってところに関して頷いたわけじゃないよね？ね？

「けど、今すぐ慣れるとは言わないわ。ゆっくり、自分のペースでいいから。いつか本当の家族になればいいと思っているわ」

「つ……はいー！」

……

そう、いまの俺達の関係は偽物。偽物の家族。形だけを取り繕った関係。けれど、そんな偽物も突き詰めていけば本物になるのだろうか。俺達が心から本物だと思えるようになって、きつとそれは本物になりえるのだろうか。

「じゃあ、母さんたちはもう寝るから。娘が増えたから明日からまた頑張らないとね。その代わり、老後はちゃんと面倒見なさいよ、八幡？」

「わかってるよ。ありがとう、おやすみ」

ひらひらと後ろ手を振って、お袋は親父を連れて寝室に向かっていった。ところで親父一言も発言しなかったけど了承ってことでいいんだよな？ まあ、親父だしいいな。

「ふう……」

これでとりあえず、一色は学校を辞めずにすんだ。予定よりあっさり終わったとはいえ、親にこんなに真面目に何かを頼んだのも久しぶりだったから、さすがに疲れたな。

「せんぱい……ありがとうございます」

見上げると、一色が申し訳なさそうな、ともすれば今にも泣きそうな顔をしている。本当に普段は凶々しくせにこういう時ばかりそんな弱気な顔をする。

「俺がやりたいことやっただけだから気にすんなよ。それに、妹は兄貴に迷惑かけるも

んだ」

「お兄ちゃん、むしろ小町はお兄ちゃんに迷惑かけられてばかりな気がするんだけど……」

「そ、そんなこと……あるかもしれないな。八幡反省……」

「ふふつ、それじゃあれからよろしくお願いしますね、小町ちゃん。……お兄ちゃん」
照れながらお兄ちゃんというのはやめていただきたい。なんか背德的でかわいいから。しかし、まだぎこちないが多少は表情に色が出てきた。それに少し安心している自分がいいた。

一色の部屋は物置にしている空き部屋を翌日片づけに使わせるとして、今回は小町の部屋に布団を敷いて寝てもらうことにした。多少何かを話している声が隣から聞こえてきたが、一色も疲れていたのだろう。すぐに話声は収まった。

それを確認して、俺も眠りについた。

・
* * *

「というわけで、書類上はまだだがいっし……いろはと俺は事実上兄妹になったわけだ」「わけです！」

「おいこらくつつくな」

「……………」

んんー？ おかしいな、俺真面目に説明したはずなんだけど、なんか二人の視線が痛いぞー？ やだヒツキー信用されてないの？

「はあ、あなたにしてはずいぶんと大胆なやり方ね」

「まあ確かにヒツキーらしいと言えばヒツキーらしいのかもしれないけど」

「何か不満なのかよ」

なんか口の端々から納得していませんオーラが出てるんですが。

「いえ、不満はないのよ。ただ……………どうしてさつきから彼女はあなたにくつついているのかしら？」

え、納得してないのそこ？ ちよつと八幡なに言われたのか分からない。まあ確かにさつきからべつたべつたたくつついて離れない。なんなの？ 蜘蛛の糸につかまっちゃつたの？ 俺蜘蛛の巣なの？

「いいじゃないですか。お兄ちゃんにくつつくのは妹の特権だつて小町ちゃんと言つてましたよ？」

「まあ、間違っちゃいない……………のか？」

確かに妹に抱きつかれてもお兄ちゃんは特別な感情を抱かないものなのだが、いろは

は昨日まで妹ではなかったわけで……大丈夫、いろはは妹いろはは妹。うん大丈夫問題ない。鬼のお兄ちゃんも義理の妹は萌えるだけだって言ってたもんな。あれ、大丈夫じゃなくね？

「それに、ヒツキーの呼び方が“いろは”になってるし」
「どうして由比ヶ浜はいじめてんだよ、わけわからん」

そもそも家族を名字呼びとかおかしいだろ。だから下の名前で呼ぶことになにも違和感はないはずである。そもそも朝になってそう呼べと言ってきたのはいろは自身なので俺は全く悪くない。

なんとか二人を宥めたころにはもう下校時刻だった。もう八幡げっそり。大筋の理解は得たからいいけどね。

鍵を返しに行く雪ノ下と由比ヶ浜に別れを告げて、いろはと帰宅する。お互い靴を取り、駐輪場へ向かうと、いろはが小走りで俺の自転車を引っ張り出してドヤ顔で荷台に乗った。

「さあお兄ちゃん！ 我が家へレッツゴー！ です！」
「なぜお前と二ケツする必要があるんですかね……」

そもそも小町を乗せて二人乗りすることもあまり乗り気ではないんですよ？ しかし、いろはは全くどうこうとしない。地味にむかつくからそのドヤ顔やめてまじで。

「はあ、しゃーねーな……」

「わーい！」

サドルに跨ると一色が腰に抱きついてくる。触れ合っている部分から感じるいろはの体温は、何となくさつきより低く感じた。

家に帰りつくまでの間、俺達に会話はなかった。

* * *

学校でのいろはは至極いつも通り振る舞っていた。いつも通りのあざとさと明るさで、きつとあいつのクラスの連中なんかはいろはに何かがあったなんて考えもしていないだろう。それは一重に一色いろはがこれまで維持し続けてきた仮面の賜物だったのであろう。

しかし、仮面は仮面。事情を知らない人間の前では無意識に被れても、事情を知っている人間の前では剥がれおちてしまう。

たとえば、家族の前とか。

「いろはさん、お風呂空きましたよ」

「うん、ありがと……」

家でのいろはは学校とはうって変わって声に覇気がなく、表情も薄い。いや、むしろこれが今の本当のいろはの状態なのだ。昼間のテンションの高さや俺への過剰なスキンシップもいままでどおり振る舞おうとした結果の空回りだと分かっていたら怒る気も起きない。

小町もそれが分かっているから、あえていつものテンションでいろはに接する。周りの目を気にするいろはは変化に敏感だから。

相手の目を気にして、偽り、自分を騙し、誤魔化す。そんな偽物の家族がそこにあった。

まだ始まったばかりの非日常が日常になる日は本当に来るのだろうか。それは俺にもわからないし、まずは時間をかけなければ解決しない問題だった。居場所を無理やり作ってやっただけで、俺は全くの無力だった。

夜中になって空き部屋を片づけて用意したいろはの部屋から漏れ聞こえてきたすすり泣く声に、胸が締め付けられる。あいつの苦しみをここまで感じているのに、なにもあいつにしてやれない自分にはらわたが煮えくりかえる。けれど、本当にあいつに直接してやれることはなかった。

なら、ならばせめて……家族として、兄として本物の愛情を注いでやろう。

今俺にできることは、きつとそんなちっぽけなことだけだから。

お兄ちゃんはお兄ちゃんであろうとする

私にとってのせんぱいのイメージを一言で表すなら、たぶんお兄ちゃんみたいという言葉が正しい。ぶっきらぼうで遠慮がなくて、けれど私が大変な時にはさりげなく手伝ってくれて、優しく接してくれる。きつと、一人っ子の私にとって、せんぱいというお兄ちゃん像は一種の憧れだった。

いや、憧れではなく、好きになっていたのだ。最初あった時はよくわからない変なせんぱいで、生徒会選挙やクリスマスイベントでよく関わるうちにだんだんと興味が湧いた。そして、きつときつかけになったのはあの言葉。

俺は、本物が欲しい。

偶然聞いてしまったせんぱいの絞り出すような叫びは、私の中に電流を走らせた。

本物って何だろう。

わからない、わからないけど……きつと私はそれを持っていなかった。

葉山先輩に抱いていた感情も楽しいと思っていた他の男の子たちとの遊びも、押入れの奥にしまっただけのおもちやのように無味乾燥なものに感じた。けれど、それを認めたら私のいまままでを否定するようで、それが怖くて。だからあの日、デイスティニー

ランドで葉山先輩に告白した。

——君は周りを気にせず、自分で選んだものを手にするといいい。

私の告白を断った後に葉山先輩に言われた。その時、私は一色いろはと葉山隼人が同質のもののように感じた。周りの印象を気にしてあざとい少女を演じる私と誰にでも優しくある義務感を持つ葉山先輩。どっちも自分の意思はなく、からっぽ。けれど、私を論すような葉山先輩の目には羨望のような光が混じっていた。

——君は選べるから。

そう言われているようだった。選べない彼と選べる私。ならばきつと、私は選ぶべきなのだ。いつの間にか私が走っていた道の先には少し猫背のあの人の姿があったから。

そんなせんぱいがお兄ちゃんになった。お兄ちゃんは私に本物の妹のように接してくれる。私が寂しくないように、私が孤独に潰されないように。それが優しく、うれしくて……けれど悲しかった。

それはきつと、偽物に向けられる優しさだから。

* · * * *

いろはがうちにきてから二週間が経った。養子縁組も済み、正式に比企谷いろはに

なった時は多少学校中が騒然としたが、いろはがいままでと変わらない態度なのでそこまで尾を引くことはなかった。

俺はいろはを妹のように、いや妹として接していた。一度妹と認識すれば勘違いもしないので気が楽だった。

「おにくちゃん！ はい、アーン」

「そんなことやらんぞ？」

「けど小町ちゃんには前やったって……」

「それは罰ゲームでだな」

「私じゃ……だめですか？」

「だから……はあ、一回だけだぞ」

「わくわく！ お兄ちゃん大好き！」

「はいはい」

だからと言って昼休みにこんなことをするのは恥ずかしいんですが、しかも教室で。ここ一週間ほどは俺の教室でいろはと一緒に昼食をとっていた。最初の頃はクラス中の視線を集めてしまって、ぼつち的に死にそうだったが、最近はどうもみんな気にしなくなったようだ。このクラス順応するのはやすぎ。後ろからなんか視線を感じるのは無視だ無視、振り向いたら死ぬ。

名字が変わったその日からこんな調子なので、学校でのいろはと俺は「仲のいい兄妹」と認知された。実際これだけ「仲良くみせて」いることや、いろは自身が全く苦を感じさせないおかげで、当初想像していた黒い噂はほとんど流れなかった。

しかし、家では――

「ただいま」

「ただいまです……」

「仲良くみせる」必要がない家ではいろはの声のトーンは落ちる。最初の頃ほどではないがやはり表情には陰が落ち、しかし俺の袖をぎゅつと掴んで離さない姿は見ていて痛々しい。夜だつて未だ毎日、泣き声が漏れ聞こえてくるのだ。学校だけでも外面を維持するのに、どれだけ精神を摩耗させているのだろう。

「……………」

「……………」

痛々しい姿を見せながらも、いろははなにも話さない。だから、俺もなにも話さない。ちよつとしたどうでもいい話なんかはするが、肝心なことは、話せない。俺にはなにもできないから。

ソファの隣までついてきたいろはの頭をただなにをすることもなく撫でてやる。やはり俺達の間に会話は無い。俺からこれ以上踏み込むのは、きつとタブーだから。

それにしても、今日はやけに静かな気がする。いつも金曜の夕方というやつは近所の子供が遊び疲れて帰ってくる声や学校の終わった小町が……。

「あ……」

すっかり忘れていた。そういえば今日から「受験追いこみ合宿」なるものをやるから小町はいないんだっけ。親も帰り遅いだろうし、食事は二人分でもいいのか。

家に二人きり。けれど相手は妹、家族だ。なにか特別な感情を抱くこともない。いや、抱いたとしても、比企谷八幡という人間性はそれを許さないだろう。だから、なにも問題は無い。

「飯の用意するから風呂入ってこいよ」

「は……」

いろはを風呂に促し、夕食の用意をする。かすかに聞こえてくる水音もさほど気にならない。

静かに食事を済ませ、洗い物などを終わらせて風呂から出るころには、もうだいぶいい時間になっていた。そろそろ寝ようと布団に入って目を閉じる。別に眠いわけではないが、ただ寝る体勢をとる。目を閉じて横になるだけでも睡眠時の八割ほどの効果があると聞くし、そのうち眠れるだろう。

夜更かしをしないのは逃げるためだった。なにかの拍子にいろはの泣き声を聞いて

しまえば、途端に俺の中にはどす黒い何かが湧きでてしまいそうだし、衝動的になにかをしようとして場を引っかき回しかねない。ならば、なにもしないべきなのだ。

電波時計しかない部屋は静かだ。冬の今は虫の声も聞こえない。だからだろうか、完全な静寂は逆に耳鳴りのようにうるさくて、なかなか俺を寝かせてくれない。耳鳴りを無視しながら目を閉じ続ける。なにも考えないようにして一定のリズムで呼吸を行う。

どれくらい経つただろうか。相変わらず寝付けない俺の部屋の扉が、キイツと控えめな音を立てて開いた。思わずそちらに目をやると、パジャマ姿のいろはが立っていた。

「あ、お兄ちゃん。ごめんなさい、起こしちゃいましたか？」

「いや、まだ寝ついてなかったし気にしなくていい。どうした？」

「あ……………いえ、えつと……………」

いろはは口ごもる。何か言いたげに口の中をもごもごさせて、舌の上で言葉を転がしてから、声に変えてきた。

「あの……………一緒に寝ちゃ、ダメですか？」

「え……………いやそれは……………」

兄妹と頭では認識していても、まだなつてから一月も経っていないのだ。そんな年頃の男女が一緒に寝ると言うのは……………。

しかし、そんな俺の逡巡も、彼女の瞳に浮かんでいる不安を感じ取ると意味をなさな

い。個室という空間は人間にとってある種必須のものといえる。どんなに友達や家族といるのが楽しい人間でも、一人になる時間は必要だ。しかし、一人ということはつまり孤独であり、人は時にたった一枚の扉を隔てた状態でも孤独に苛まれる。孤独とは人の思考を負の感情で満たしてしまう。考えないようにしても、悪い方へ悪い方へ、考えてしまうのだ。

きつというはは不安と恐怖、悲しみに押しつぶされそうになっているのだろう。それなら、そういうとき「お兄ちゃん」なら……。

「俺背中向けて寝るから、あんまりくつつくなよ」

「はい……ありがとうございます」

壁を向いて身体を寄せる。視線を外す一瞬、いろはの顔にさつきとは別の悲しみが見えた気がしたが、その意図は俺にはわからない。

もぞもぞというはがベッドに入ってきて、ぽすつと俺の背中に顔を埋める。くつつくなどと言ったはずなのだが、これで少しでもいろはが安心できるといふなら払いのける理由はない。いろはの体温と吐息を背中にかすかに感じながら、目を閉じる。多少落ち着いたのかしばらくすると呼吸が一定になり、押し付けられる感触も少し和らいだ。

「おこ、ちゃ……き……」

いろはが寝言か何かをつぶやいたが、少しくぐもった声を聞き取ることはできなかつ

た。

いろはが家族を失ってから三週間ほど、思えば学校以外でいろははほとんど外に出ていない。それはつまり一人で考える時間が増えてしまうということであり、今のいろはにはあまりよくないことのように思えた。

何かしてやらないとな。

妹が苦しんでいるなら手助けをする。それが、兄の務めだから。

* * *

「おはようございます……」

「おはよ」

朝、朝食の用意をしているといういろはが起きてきた。いろはは朝が極端に弱い。俺も小町と比べれば強くはないが、いろはは起きてから覚醒までに一時間近くかかるようだった。というか、どうでもいいけどその着崩れたパジャマどうにかしてくれませんかね。全然どうでもよくなかった。レディとしてどうでもよくない。

二人で食事をとるのはこれが初めてだ。いつもは小町がいるし、時々お袋もいた。まあ、その時も今日の天気の話とか当たり触りのない話しかしていないし、ましてや俺と

話すことはほとんどない。

「なあ、いろは」

「ふあい?」

だから、俺から話を切り出すのはなかなかイレギュラーなのだが、まだ頭に靄のかかっているいろはは特に気にしていない。もふもふとトーストに齧りつきながら視線を向けてくる。

「今日遊びに行こうぜ」

「ふあい……ふあい?」

なに君「ふあい」しか話せないの? なぜか固まってしまったいろはは手からトーストを落とし、ポスツと平皿に受け止められる。

「どうした? いやか?」

「い、いえ……嫌ではないんですが、お兄ちゃんから遊びのお誘いとか天変地異の前触れかと……」

なにそれ酷くない? 俺が誘っただけで地球の危機とかそこまで珍しいわけ……いや、珍しいわ。小町誘うのも動物イベントの時くらいだもんな。

なんか改めて考えると超らしくない。お兄ちゃん死にそう。だから、ちよつと対応もぶっきらぼうになってしまう。

「そこまで言うなら別に行かなくていいぞ」

「いえ！ 行きます！」

珍しく家で張り上げられた声に少しうれしくなる。

「じゃあ、十時ごろに出るから準備しとけよ」

「は、はい」

食事を終えて身支度を済ませてリビングで本を読んでいると、バタバタという音が下りてきた。白ニットにダツフルコートに身を包んだファッションはかわいらしい。少し頬が染まっているのは化粧でチークでも使ったのだろうか。

「お、おまたせしました」

「おう、かわいいなその服」

「そ、そうですか……?」

恥ずかしそうに照れるいろは。その表情に無理をしている様子は見られない。小町のスパルタ特訓によつて相手の服装を褒める癖がついてしまった。小町色に染まっちゃう！ とところで、妹の服装を褒めることに意味はあるのだろうか、なさそう。いやけど褒めないと怒られるし。

「じゃ、行くか」

「はい……」

必要な荷物を持って、俺達は玄関を出た。

兄と妹の想いはすれ違う

「こいつがハイギョ。肺呼吸するから時々水面まで上がってくるんだ。水がなくても生きていけるから水辺が枯れても夏眠って行動で休眠してな、アフリカなんかでは泥から作ったレンガから雨が降るとハイギョが出てきたることもあるんだと」

今私はお兄ちゃんと水族館に来ています。実は水族館ってあんまり来たことないんですよ、ここに誘ってくる男子って露骨に下心丸だしと言うかがつつきすぎる人が多いですし。

「で、これがメジロザメだな。メジロザメ科って英語でレクイエム・シャークって呼ばれてるんだ。肉食性が高い凶暴な種で、狙われたらひとたまりもないからな。そういう意味も込めてつけられたのかもしれない」

「うわあ、怖いですね……」

まあ、お兄ちゃんの場合はたぶん動物が好きだから連れてきただけなんだろうな。いつもより饒舌だし、時々楽しそうに笑いかけてくる。

ああ、この人はこんな顔もできるんだなって新たな一面を知ることができたことが嬉しくて、同時に少し胸が痛くなる。自分の心をまた一つ理解してしまったから。

「ていうか、お兄ちゃん詳しくすぎませんか？」

「ん？ まあ、生き物は好きだし、ガキの頃は図鑑とか読みふけったりしてたからな。けど、人間って動物は嫌いだな」

「それ、威張っていうようなことじゃないですよ……」

お兄ちゃんと一緒に過ごす時間は楽しい。それは事実なのだけど、自分の本心を隠して過ごさなきゃいけないのは辛いし、そんな私に対してなんでもないように相手をするお兄ちゃんを見ると悔しくなる。

いや、本当はどこか本気で楽しめていないのだ。心にぽっかり空いてしまった穴。その深淵が私を離してはくれない。一人ではたやすく呑み込まれてしまっていたであろう闇から私の手を取ってくれたのは、まぎれもなく彼だった。いつものように全部を達観したような顔に真剣な光を宿して。

何もなくなってしまった私にとつて「せんぱい」は最後の光だった。白い糸のように心許ないけれど、まばゆい輝きを持っていて、私はそれにがむしやりに手を伸ばしてしまった。自分よがりな救済を得るために。

けれど、「せんぱい」は「お兄ちゃん」になった。最初はせんぱいの特別な場所に入ることができたことが嬉しかったけれど、いつの間には追いかけていた後ろ姿が消え、その姿が別の道に見えることに気付いた。追いかけていた時よりも近い。けれど、その

別の道は私の道とは決して交わらない。近いのに……決して届かないほど遠い。

“お兄ちゃん”ではダメなのだ。たとえ偽物でも“お兄ちゃん”であろうとする以上、きつとお兄ちゃんは優しい。けれど、“お兄ちゃん”では私を深淵から引き上げることはできない。その優しさは、ひどく残酷なものだ。

“お兄ちゃん”では代わりにはなれない。私が大好きだったお父さんお母さんの代わりには……。そんなことを考えていたからだろうか――

「あ……」

それを見つけたのはある意味必然だったのかも知れない。イルカの親子の水槽。まだ背びれも尾びれもふにやふにやな子イルカにびつたりと寄り添って泳ぐ母イルカ。頼りない子供を支える母の瞳に慈しむような愛を感じて、それはきつと、私がもう受けることのできないものだとして理解して……。

理解した時には頬を涙が伝っていた。

・
* * *

俺はまた間違ったのではないだろうか。親子イルカを見て静かに涙を流すいろはを見たとき、心の奥底にしまっていた疑問が湧きあがる。いや、きつと間違っていないで、

やっぱり間違っていたのだ。現実には正誤の二択で割り切れるほど単純ではないのだから。

いろはを妹にしたこと自体に後悔はない。それできつと、いろはは多少なり救われたはずだから。けれど、きつと最善ではなかった。

俺が用意したのは偽物だらけの箱庭。偽物の親、偽物の兄妹、偽物の家族。全てが偽物。それを与えられた人間にとつて、その偽物はどれだけ優しく、甘く、そして苦しいのだろうか。それは、俺にはわからない。

俺によつて「本物が欲しい」と思わせてしまつたいろはに、俺自身が偽物を用意するなんてなんて傲慢で、自分勝手なのだろうか。兄として優しくすることが、逆にいろはを傷つけることになつていたのではないか。ならば、それならば、俺はどうすべきだつたのだろうか。

わからない、わかりたい。涙をぬぐつて「次、見に行きましよう」とこちらに見せた仮面を被つた笑顔ではなく、本物の笑顔を見たい。それが俺の願ひだつた。どうして願うのか。それはきつと俺が……。

そこで思考が止まる。その先の言葉はとても単純なものはずなのに、薄い靄がかつたように汲みとることができない。それ以上は考えるなど化物と称された理性が警鐘を鳴らす。きつとこの靄の先にある言葉はもういらぬものだ。いらぬのだか

ら、捨ててしまおう、ゴミ箱に入れてデリートしてしまおう。

「今日はありがとうございました」

「いや、うちに来てから特に遊びにもつれてってやれてなかったからな」

「……そう……ですね……」

水族館を出て、短く言葉を交わす。会話はそれだけ、この後は無言で帰るだけで――。

「……………」

「いろは……?」

コートの袖を引かれる感覚に、立ち止まって振り返る。小さく袖を掴んだいろはは何かを言い出そうともごもご口を動かしている。しかし、待つてもその口から声が紡がれる様子はない。冬の日は駆けるように沈んでいき、あたりは徐々に暗くなっている。気温も下がる一方の屋外にずっといたら、いろはが風邪をひいてしまうかもしれない。軽く頭をぼんぼんと撫でてやり、背中に手を添える。

「風邪ひくから早く帰るぞ」

「あ………はい………」

その後はどちらもしゃべらない。この空気は嫌なものだが、俺にはどうすればいいのかわからなかった。

・・*

夜。昨日と同じように目を閉じて寝る努力をしていると、キィと扉が開く。今この家には俺を含めて二人しかいないのだから、誰が入ってきたかは明白だった。

「……………」

いろはが何も声をかけてこないのも、無理に目を開けてこちらから声をかけることはしない。ゆつくりといろはが近づいてきて、ベッドに潜り込んでくる。

「どうした?」

そつと声をかけるとびくつと小さく震える。その姿は産み落とされたばかりの猫のように小さく、儂く感じた。ゆつくりと頭を撫でてやると、いろはは静かに顔を上げる。

「お兄ちゃんはやさしいですね」

「そりゃあ、お兄ちゃんは妹にやさしいもんだからな」

兄は妹にやさしい。妹というだけで無条件に助けるし、妹が困っていたら見過ごせない。それが「お兄ちゃん」だから……。

俺の返答に対して、いろはの表情に少し陰りが混ざった。

「それじゃあ……どうしてあのととき、私のことを助けて、家族になろうって言ってくれたんですか?」

……………。

なぜか、と問われれば返答に困る。あの時、俺の中での一色いろはという存在はとて
も大きなものになっていた。おそらくは奉仕部という空間と同じか、それ以上に。けれ
ど、それがどういう意味で大きくなっていったのか、俺には分からなかった。それは、俺
には言葉にすることのできない感情だったからだ。

分らないから、別の言葉でごまかしてしまう。

「たぶん、お前が俺の唯一の大事な後輩だからだ」

「そう……………ですよね……………。お兄ちゃんにとって今の私は妹で、その前は後輩なんですよ
ね……………」

いつの間にか背中にかかれた手に力が込められる。

「後輩だった私は葉山先輩が好きで、それで『せんぱい』に迷惑をかけていた子だった
んですよね」

「迷惑をかけられたつもりはないが、葉山が好きなのは事実だろ？」

俺の中での一色いろはという少女は、あざとくて計算高く、強くてまっすぐな存在で、
葉山隼人が好きな少女だ。一度振られた程度では諦めず、むしろそれすらも踏み台にし
ようとする芯の強さには素直に凄いと感じた。

だから、いろはの俺に対する行動に特に深い意味はなく、強いて言えば葉山を攻略す

るための手段であり、生徒会運営のための腕としてだった。だから、俺は勘違いののかの字もすることはなかったのだ。

「今は違いますよ……」

「なにがだよ」

「私は、お兄ちゃんが好きです」

だから、いろはの言葉は全くの予想外で、俺はつい言葉を詰まらせた。いろはの確かな意思を持った目を見てしまえば、「プラコン乙」などという茶化しもできない。

「それは、勘違い、だ……」

だから、一番嫌いで、残酷な言葉に逃げる。

「お前は絶望した状態から手を差し伸べた俺に対して少し勘違いをしているだけだ。つり橋効果に近い、あるいはブラシーボ。だから、軽々しくそんなことを口にするんじゃない……」

人間は救いに弱い。二年前の春、由比ヶ浜結衣が犬を助けた俺を憎からず思ってしまったように、恐怖の中で助けてくれた相手に特別な感情を抱く。しかも、今回俺はただ手を差し伸べただけだ。どん底から引き上げる手段も力も持たないのに、手だけを伸ばしたのだ。ただの偽善、まさに偽薬。ならば、そこから生まれた感情も、偽物だ。

「お兄ちゃんは、そうやって逃げてきたんですね……」

ぼそりとつぶやくと、身体を少し上げて俺に近づく。いろはの顔が近い、少しでも動いてしまえば唇が触れてしまうほどに。

「勘違いでもいいから、〝お兄ちゃん〟、妹のお願い、聞いてください」

お兄ちゃんの響きが変わったことで、俺の思考が〝お兄ちゃん〟になる。妹のお願いは無条件に聞くのがお兄ちゃん、妹のためなら何でもするのがお兄ちゃんなのだから、いろはの頼みを〝お兄ちゃん〟は断らない。

「キス、させて……」

だから、これは救済だ。家庭という箱庭だけではいろはの心は癒せない。もっと別の何かも必要だ。だから、それを彼女が望むと言うのなら――

「ん……」

俺は、拒めない。

軽く触れ合う唇。ただ、身体の一部を押し付け合うだけの行為に、これほど罪悪感に苛まれるものだろうか。しかし、それを救済だと諭す心が罪悪感を薄れさせる。マヒした心はただ行為を受け止める。

「ありがとう……ごめんなさい……」

唇を離れたいろはは、何かを諦めたような笑みを浮かべていた。

* * *

お兄ちゃんは知らない。私がお兄ちゃんに救われる前から比企谷八幡という男の人を好きだということを。だって、お兄ちゃんの中では私は葉山先輩が好きという大前提があるから。それを考えてずっと動いてきたから。

だから、この胸の痛みは自業自得。お兄ちゃんが捻くれていることを加味しても、私が素直になれなかった結果だから。

気付いた時にはもう遅い。大切なものは、失ってから初めて大切だったと気付くってどこかで聞いたけれど、本当だ。だから、もう手は伸ばせない。

それなら、せめて今を大事にしよう。お兄ちゃんは優しいから、きつと苦しみながらも私に答えてくれる。だから、キスも拒んでこない。

お兄ちゃんとのキスはどこか甘酸っぱくて、心の穴から少し身体が抜け出したような気がした。けれど、それと同時に心の別のところが痛んだ。おかしいと叫ぶ心を抑え込む。

だって、お兄ちゃんと妹は仲良くあるものなんだからおかしくなんてない。それなら、兄妹でキスするのだからきつとおかしくはないんだ。

心のどこかで、別の私がうずくまって泣いているのを、私は無視した。

末妹はその想いをひた隠す

受験勉強というのは第一に日頃の自分との戦い、第二に自分のメンタルとの戦いって言ったのはお兄ちゃんだった。まずはコツコツ勉強をして、受験が近づくとつれて感じるプレッシャーを乗り切れれば大抵成功するってことみたい。まあ、小町は結構プレッシャーに負けそうになった時にお兄ちゃんの軽口とかで乗りきれたところもあるので、自分との戦い”と言うよりは”お兄ちゃんを引き連れた自分との戦い”って感じだったわけだけど。

要はなにが言いたいかと言うと――

「小町の総武高校合格を祝して、かんばい！」

「「かんばい！」」

小町はなんとか無事に、総武高校に合格することができました。これも一重にお兄ちゃんのおかげ、あ、今の小町のポイント高い！ まあ、去年はむしろお兄ちゃんの相談に乗ることが多かった気がするけど。

「えへへ、ありがとうございます」

というわけで今日は小町の合格祝いパーティーです！ と言ってもサイズでのちよっ

としたお食事なんですけどね。ファミレスって少しはしゃぐ程度なら許されるし、高校生のお財布事情的にリーズナブルなのが嬉しい。

お兄ちゃんといろはさんだけでなく、雪乃さんや結衣さんも来てくれて小町とつてもうれしいのです！

「いやー、小町ちゃん合格出来て一安心だよー」

「ま、俺は信じてたぞ。由比ヶ浜が合格できて小町が受からない道理はない」

「どういふことだし!？」

信じてたつて言いながら合格発表日にはお兄ちゃん小町以上にそわそわしてたし、合格してた旨を電話で報告したら大号泣してたけどね。卒業式もそうだったけど、なんでお兄ちゃんの方が小町よりも泣いちやうかな……。

「これで小町ちゃんもうちの生徒になったし、来年はもつと楽しそうだね」

「確かにその通りなんだが、小町と話すために俺に乗っかってくるのやめてくれない？
重い」

「あ、お兄ちゃん女の子に重いと最低ですよ」

「肘がいてーんだよ肘が！」

お兄ちゃんを挟んで隣に座っているいろはさんも合格の時は小町以上に喜んでくれた。そのせいでお兄ちゃんを宥めるの小町一人でやるはめになったんですけどね。

小町が勉強合宿でお泊りに出かけたあの夜を境に、いろはさんは急速に元気になっていくように感じる。家でもかなり話をするようになったし、よく笑うようになった。きつとお兄ちゃんがまたなんかやってくれたんだな、と思うと少し誇らしく思う。

けど、お兄ちゃんへ向けられるいろはさんの視線に時々別の感情が混ざっているように感じるのは小町の気のせい、なのだろうか。なんだろう、あれは……怒り？ 悲しみ？ ひよつとしたらお兄ちゃんまたなんかやらかしたのかもしれない、ゴミいちゃんだし。けど、修学旅行の後の奉仕部みたいな感じじゃないし、ゴミいちゃんだったとしても一時的なもののかな？

「小町さん、どうかしたのかしら？」

考え事をしていてあまりしゃべらなかつたせいかな、雪乃さんに心配されてしまった。雪乃さんも初めてあったころに比べて丸くなったよね。最初の頃はこんな心配するような顔想像できなかつたし、これもお兄ちゃんの影響ですか？ いや、たぶん結衣さんの影響なんだろうなー、ゴミいちゃんにこんな芸当できないだろうし。

「いえいえ、来月からはこんな楽しい時間が学校でもできると思うと感慨深いのですよ」「ふふ、そうね」

実際、今までは小町だけ中学生で少し疎外感を感じていたので、学校でも皆さんと一緒にというのワクワクして仕方がない。いろはさんがきてから二人はお弁当持ってい

くようになったけど、中学までは給食だから小町だけお弁当がないのも不満だったしね！
「そういえば、小町ちゃんは部活どうするの？」

「それはもちろん奉仕部に……」

「いや、それはやめとした方がいいんじゃないか？」

小町の言葉を遮るのはお兄ちゃん。まさか、女の子とのイチヤコラ空間に小町は邪魔だと言うのだろうか。それは小町のポイント低い。女性陣全員から睨まれたお兄ちゃんだけど、ちゃんとした理由があるみたい。

「いや、俺ら三人来年は三年だろ？俺や雪ノ下はまだ大学受験に余裕があるにしても由比ヶ浜は論外だし、俺らが引退したら小町一人になっちまうじゃねえか」

「論外……」

結衣さん、なんかこの間の試験学年最下位ギリギリだったって聞くし、小町もちよつと擁護できそうにないです……。それに、小町のことを考えてくれているのはポイント高いし……。お兄ちゃんって普段はデリカシーのかけらもないのに、時々小町のことちゃんと考えてくれるからドキドキしちゃうよ。ギャップ萌えてやつなのかな？

「確かにそうね。それに、小町さん一人になったら奉仕部の責務を全て押し付けてしまうことになるものね」

「そういうことだ。だいたい、生徒の手伝いを生徒がする部なんて普通は存在すること

自体おかしいんだから、自然消滅するのが一番いい。むしろ、生徒会に入っているのは手伝いをした方が有意義だろ」

「え、私次も生徒会長やるんですか？」

「え、むしろやらねえの？」

お兄ちゃんというはさんが顔を見合わせる。

「だって、次やるとなるとお兄ちゃんや葉山先輩に手伝ってもらえませんし」

「お前結局この三カ月ちよつと、一度も葉山に手伝い頼んでないけどな」

「だって、お兄ちゃんが優秀なんですもん」

「俺のせいだよ……」

お兄ちゃん呆れてるけど、実際お兄ちゃん、いろはさんの手伝いで遅くなること多かったからなー。ていうか、この二人めちやくちや仲良いよね。いや、兄妹仲がいいのは末の妹としてもうれしいことなんだけど。

「そんなこと言うならもう手伝わんぞ」

「わー！ お兄ちゃん待つて！ 冗談ですから！ ほら、あくんしてあげますから！」

「なぜする必要があるのか分からないだけど……」

なんか仲良くしすぎな気がする。小町のお祝いなのにいちやいちやする兄と姉……小町の……なんていうか……むううう……。

「お兄ちゃん！」

「ど、どうした小町？」

「はい！ 小町からもあーん」

小町の手元にあつたアラビータをフォークに指してお兄ちゃんの口元にずいっと突き出す。線対象に反対側にはいろはさんがシーフードグラタンを差し出しています。

お兄ちゃんを挟んでいろはさんと視線が交錯する。いろはさんの方が姉だけど、小町の方が妹歴は長いんだから！

お兄ちゃんの一人占めは許しません！

* * *

「疲れた……」

なぜか流れで二人の妹から「あーん」を強要されたあげく、雪ノ下と由比ヶ浜から冷ややかな視線を向けられた。どうして被害者の俺がそんな目で見られなきやいけないんですかね……。本当に女の子って理不尽。

「まったく、お前ら調子乗すぎ……」

「（めんなさ〜い）」

なんで二人してそんなかわいくハモってるの？ あざといは皆姉妹なの？ ほんとかわいいからやめて、お兄ちゃん死んじゃう。

はあ、と息を吐く。三月になって少しずつ暖かくなってきたと言っても、口から洩れる呼吸は白いもやを形成する。夜になれば気温はぐつと下がってコートを着ていても沁みるような寒さに体が苛まれる。

両脇からとんつと軽い衝撃。目をやると両方の腕に二人の妹が抱きついていた。

「歩きづらい……」

「だって寒いんですもん」

「お兄ちゃんぬつくぬくー！」

まあ、歩きづらいけど二人とも軽いし、つうか本当に軽いなこいつら。ほとんど同じもの食ってるはずなのになんでこんなに軽いんだ？ 人体の神秘すごい。

「そうだ小町ちゃん！ 今度の日曜にららほに買い物に行こうよ！」

「あ、いいですね！ 最近ほとんど出かけてませんでしたし、自分へのご褒美ですね！」
お前は中学生にして丸ノ内のOLみたいなこと言ってるじゃねえよ。ああいうOLして自分にご褒美って時じゃなくても絶対いろいろ買ってるよな。ご褒美の概念が乱れる！

「もちろん、お兄ちゃんも一緒に行くよな？」

「えー……」

ああ、なんか二人とも目がランランと輝いてるな。これ逃げられない上に完全に荷物持ちさせられるパターンだわ。

まあ、小町が頑張っていたのは事実だからな。多少のわがままは聞いてやるのがお兄ちゃんというものだ。

「……分かったよ」

「やったー！」

俺の目の前でハイタッチをかます二人。本当に最近息びったりだな、やっぱりあざとシスターズは伊達ではなかった。

「……………」

ふと横目にいろはを見る。ケラケラと楽しそうに笑うその顔は少しだけ仮面を被っているように見える。正確には何かを隠しているように、だろうか。おそらく俺以外には分からない程度の薄い仮面。

あの目を境にいろはは吹っ切れたように明るく振る舞っていた。急な変化に一時は小町も両親も驚いていたが、悪い変化ではないので受け入れていた。

おそらく、悪い変化ではないのだろう。明るくなるのが悪いことであるとは思えない。

しかし、俺にはいろはその変化が一概にいいこととも思えないでいた。

「……………」

夜中になるといろはは每晚俺のベッドに潜り込んでくる。そこに昼のような明るさはなく、しかし、どこか妖しい艶を含んだ空気を纏っている。

「お兄ちゃん……………」

「……………」

か細い声に俺はなにも答ええない。声を上げれば、この存在が消えてしまいそうで怖いのだ。壊れてしまいそうで、それが…………怖い。

「お兄……………ちゃん……………」

幾度となく、唇同士が甘く触れあう。いろはからもたらされる柔らかな触れ合いに、俺は拒絶を示さない。露骨に受け入れることもしない。なにもせず、いろはのしたいようにさせることで救済を行う。

数度の触れ合いの後、いろはは俺の胸に顔を埋めると、しばらくして規則正しい呼吸が聞こえてくる。それを確認すると、ぽんぽんと軽く頭を撫でてやり、俺も眠りについた。

こんなことが何になるのか、俺には分からない。分からないけれど、できることがあ

るのならやるしかなかった。

・・*

そして社畜のような平日を終えて日曜日。俺たち三人はららぽーとに来ているわけだが、さつそく精神的に疲れている。

いや、今日のヒーロータイムは録画予約を三回確認したから大丈夫。その点は抜かりない。しかし、今俺の精神を蝕んでいるのは周囲の視線である。

いやねもうね、最近妹たちと外に出るとこの間みたい腕にしがみついてくることやしよつちゆうなんだが、三人で人の多いところに出かけるのは今日が初めて。右腕に小町、左腕にいろはを引き連れてリア充いっぱいなららぽ内を進んでいるわけだ。

つまりね……男どもの呪詛混じりの視線が痛いんですよ。

二人の時はまあ、時々見られる程度なんだが、三人だとう見ても両手に花のハーレム王。しかも公衆の面前でイチヤイチャするとか俺が周囲の男どもでも呪い殺す視線を突きつけるレベル。

さらに彼女たちの男までこつちを見ているせいで連鎖的に女性の視線まで俺に突き刺さって、ぼつちのメンタルはすでにポロポロ。そこは男をしつかり怒ってよ彼女さん

……。

「あ、お兄ちゃん！あのお店行ってみようよ！」

「あ、あのお店なんてよくないですか、お兄ちゃん！」

攻撃力を孕んだ視線から逃れるためにメンタル（豆腐）の中に閉じこもろうとしていると、小町というはが気になる店を見つけたようだ。お互い“反対側”の店に向かう。

……俺を掴んだまま。

「いだだだだだだだ!!!」

なぜだ!? なぜ俺は大岡裁きをされているんだ!? おかしいよ、八幡悪いこととしてないのに！

「あ、ごめんなさーい」

こいつら……。

「そもそも今日は小町のために来たんだから小町優先だろうが……」

「そうでしたら、テヘツ」

「テヘツ、じゃねえよ」

裏拳でコツンと額を小突くと「あたっ」と額を抑える。あざとかわいいからやめてね。

「むー……」

「どうした、小町？」

なぜか唸っていた小町だったが、「なんでもない！」と俺をひっぱっていく。なんかよくわからんがプリプリ怒る小町がかわいいのでお兄ちゃん許しちゃうぞ。

しかし、いかな妹のものとはいえ、女性物の服はよくわからん。そもそも俺自身が私服にさほど興味がないからな。むしろ制服最強まである。日常的に制服とかI—9029号みたい！俺狙撃も格闘もできないけど、雄二君弟だけ。そういえば、風見家は千葉の姉弟？あ、なんだ彼らも同士か。

「お兄ちゃん、これどうかな？」

小町が自分の身体に当てているのは春物のワンピース。ふむ、普段元気系で攻めている小町に珍しく清楚系に挑戦するわけだな、なんて言えば「うわお兄ちゃんキモい」と言われるのは必至。だから俺の返答は決まっているのだ。

「あー、うん。世界一かわいいぞ」

「うっわ適当だなー……」

ま、こっちでも引かれるんですけどね。俺に逃げ場がないのは間違っている。「お兄ちゃん、これなんてどうですか！」

今度はいろはが薄でのピンクパーカーを羽織って見せてきた。

「ふむ、世界一似合ってるぞ」

「うっわ……」

うっわって……うっわって……「適当だなー」がないだけで精神へのダメージが高まって吐血しそう。

その後も俺にいろいろと服を見せてくる小町というはを適当にあしらって時々引かれて凹んでを繰り返していると、時間はお昼時になっていた。俺の手には多数の包装された袋。いろはも昨日親父から金をもらっていたはずだが、使うのは忍びないらしく、見て回るだけで満足するつもりだったらしい。が、せっかく来たのだ。年頃の女の子ならいろいろ欲しいのだろうと思ひ、少し買ってやった。もちろん平等に小町の分も。人間は平等ではないから、兄は妹に平等でなければならぬ、ってブリタニアな若本さんも言つてた。いや、言つてないかも。

「そろそろ飯にするか」

「うん！ あ、お兄ちゃん！ あのお店前から気になつてたからあそこ行こうよ！」

「分かつたから、そんなに慌てるよこけるぞ」

「大丈夫だつて……あつ」

「あつ……」

フラグ回収の早すぎる末の妹は駆けだそうとした途端に足を取られてバランスを崩してしまふ。その姿が見えたときには俺の身体は自然と動いていて、小町の肩を掴んで抱きしめるように引きよせていた。

「つたく、大丈夫か？」

「……………」

返事がない、ただの小町のようだ。いや、たぶん外傷はないはずなんだが、もしあつたら俺の胸板が凶器と言うことになってしまう。

「おーい、小町ー？」

「はっ、あ、うん。大丈夫大丈夫！」

ぺちぺちと頬を軽く叩いてみるとようやく小町が反応した。大丈夫と繰り返しながらパタパタと店の方に駆けていってしまった。また転ぶぞお前……。

「どうしたんだ、あいつ……………」

「は、はは……………」

「？ なんだよ……………」

まるでわけのわからん末妹の行動に首をひねると、隣の長女が乾いた笑いで返してきた。顔を向けると、なぜか呆れた顔をされる。

「お兄ちゃんって、やっぱりあざといですよね」

「それ、お前ら妹たちには絶対言われたくないわ」

よくわからんことを言ってくるので適当に流して、俺達も小町のところに向かった。

* * *

「うー……」

眠れない……。掛け布団にくるまってだいぶ経つのに全然眠れない小町です。

眠れない原因は分かっている。昼間予期せずにお兄ちゃんに抱きしめられてしまったせいだ。

抱きしめられてあんなことを言われたのはたぶんあの時以来。家出した小町をお兄ちゃんが探しに来てくれた時以来だ。見つかった時は怒られると思って震えていたけど、お兄ちゃんは優しく小町を抱きしめて——

——大丈夫か？

一言だけ言って優しく包み込んでくれた。口下手で友達がいなくて、どうしようもなく、でも優しいお兄ちゃん。あの頃も今も、お兄ちゃんは大きくて、きつとこんなに大きい人は生涯小町の前には現れないって感じて……。

「~~~~~」

枕に顔をうずめてなんとか声を押し殺す。顔が燃えるみたいに熱い。きつと今鏡を見たら小町の顔はアニメみたいに真っ赤なのだろう。

きつとあの時から、小町の心はお兄ちゃんに向いていたんだ。けれど、小町は妹だか

ら、お兄ちゃんはお兄ちゃんだから、心の箱にそつと蓋をした。

けど、その蓋は開いてしまった。閉じるすべはもうない。けど、嫌われたくないから、拒絶されたくないから、暴れまわる心は隠さないと。

お兄ちゃんは新しくできたお姉ちゃんのことでもまだ大変なんだから、小町は迷惑をかけるようにしないと。

溢れそうな想いを隠すのは疲れる。疲れて、疲れて……眠くなる。

「お兄ちゃん……好きだよ……」

暗転。

だからお兄ちゃんはお兄ちゃんではいられなくなる

「さて、行くか」

また社畜のような平日が過ぎた。終業式関連の手伝いだの平塚先生の命令なので勉強以外もこなしていて、帰ってきたら高校入学までのモラトリアムを享受している小町が夕飯を用意して待っているのだから完全に社畜である。

いろはがうちに来てから、土曜日は二週に一度くらいの頻度で外出をする。日曜はヒーロータイムがあるので出かけるなら土曜日が適任である。

「あれ、お兄ちゃん出かけるの?」

玄関で靴を履いていると、寝ぼけ眼の小町が下りてきた。去年は受験勉強のためか嫌に規則正しい生活を送っていたが、その反動か最近の小町の生活リズムがやばい。先週の土曜日なんて三人そろって昼まで起きなかったが、来年までに生活リズムを戻させないと小町のせいで俺も遅刻しそうで怖い。

「ああ、ちよつとな」

「ふーん……わかった」

俺が話したくない空気を出しているのを察したのか、小町は特に追及してこない。い

つもなら「お兄ちゃんが休みの日に出かけるとか、小町的に超々ポイント高い！」とか言つて、誰とどこに行くのか聞いてくるんだが。いや、休みに出かけるだけでポイント貯まるとか普段の俺どんだけ引きこもってんだよ……引きこもってますねすみません。

まあ、小町に言うとか何かの拍子でいろはにも漏れそうなので言わないわけだが、空気の読める妹でよかった。

「じゃ、いってくる」

「ほーい、いってらっしやい」

小町に見送られながら玄関を出て、自転車にまたがる。朝方の冷えた空気を切りながら自転車漕いでいると、やけに思考がクリアになる。

無意識に思考してしまうのはここ最近の妹たちのことだ。家族が増えて一カ月半ほど、俺達の関係性は安定しているようで、危うい。

俺というのはの関係性は一週間前から大きく変化していない。いや、変化していないところが問題と言える。昼間はところ構わず抱きついてくる明るい妹だ。多少わずらわしく感じることや、TPOをわきまえろと思わんこともないが、そこは大した問題ではない。なぜなら、“兄妹のスキンシップの範疇”であるからだ。頻度はどうあれ俺と小町の間でも発生していた他愛のないイベントであるため、多少の視線は気になるが問題視するほどではないだろう。

問題は夜だ。あの日以降、いろはの救済行為は毎日欠かさず行われている。同じベッドに潜り、抱きついてきてキスをする。満足するとあの諦めたような笑みを浮かべて眠りにつく。俺はその間、何も言わないし何も言わない。この行為が日課になってほぼ一月、そこに変化は存在しない。いや、変化しないことが異常と言えた。行為に変化がないということは、この救済行為によって精神的安定を保っていると思われる半面、この行為だけでは根本的な解決になりえないという側面も持っていることになる。それではただの依存だ、薬物だ。「葉山隼人のことが好きないろは」という少女」を捻じ曲げて行われるこの救済は、停滞ではなく解決のために行われるべき行為なのだ。

しかし、これに代わる救済を俺は知らない、わからない。だから、せめて停滞させられないのだ。それしかできない自分が、歯がゆい。

そして、末の妹にして実妹である小町の様子も少しおかしい。変化を感じたのは一週間ほど前だっただろうか、いろはのように小町のスキンシップも少々過剰になっているように感じている。確かに昔から仲のいい兄妹を自負していた。しかし、小町は人前だともやっても手を繋ぐ程度で腕に抱きついてきたりというボディランゲージ的スキンシップはあまり取ってこなかったはずである。それがここ最近ではまるではい対抗するかのよう接触してきていた。なんというか、らしくない。

それでいて急に赤くなったり歯切れの悪い返答をすることもある。何かあったのか

と聞いてもなんでもないと返すばかりで、何も分からないのだ。何か一人で溜めこんでしまっているのではないかと心配になってしまう。

そうして思考を巡らせている間に目的地に着く。一軒の民家、その表札には「一色」の文字がはめ込まれている。

いろはを養子にするよう親に頼みこんだ後、この家は比企谷家の所有物として預かることになった。うちの親もお人よしと言うか親バカと言うか、正直この家は所有権を破棄されてしまうと思っていただけに「十六年間過ごした場所を失うのは悲しいでしょう？」と言った母親に再び土下座で謝辞を述べたほどだった。

俺は二週間に一度程度ここに足を運ぶ。所謂定期メンテナンスだ。定期的に掃除してやらないといざいろはに返す時に埃まみれになっていたら、こちらもいい気はしないものな。

しかし、さすがに一軒家を一人で丸々掃除するのは一日では終わらない。毎回少しずつ掃除をしている状態だ。もう受験生ではないのだから小町を呼べば効率は上がるだろうが、いろはを一人にすればまた彼女の思考がネガティブ方面に落ちる可能性もあるため、一緒にいてもらっている。

いろは自身はまだここに来る決心はつかないだろう。この家に来るときつと実の両親のことを思い出してしまいうらから。だから俺一人でやるのだ。妹のためだと思

えばこの程度苦でもない。

前回もやったりリビングや水回りなんかはさつと軽く埃を取り除く程度で済ませ、二階に足を運ぶ。ずっと一階の掃除をしていたので二階に足を運ぶのは初めてだ。階段と廊下をクイックルなワイパーと雑巾で拭いて、顔を上げると一つの扉が目に入る。「I roha's ROOM」と書かれたそこは間違いなくいろはの自室だろう。

はて、と俺の動きが止まる。

掃除をするからには家中の隅から隅までやるべきなのだが、年頃の少女の部屋に無断で入るのはいかなものだろうか。いかなお兄ちゃんと言えど勝手に入ったら怒られるのである、ソースは小町。緊急事態だったと説明してもプリプリ怒る姿はかわい……宥めるのが大変だった。つまり乙女心は緊急事態をも凌駕するのである。

しかし、どんなに元がきれいでも生活していない部屋というものは予想以上に埃がたまるものである。つまり掃除しないと埃やハウスダストが将来的にいろはを襲いかねない。それはダメだ！

「ふっ」

怒られる時は怒られる時である。意を決して扉を開けた。

部屋の中は意外とすっきりしている。比較対象が小町の部屋しかないのだが、どことなくさばさばした雰囲気のない室内。自室とはおのれを映す鏡であると言うが、これが本来

のいろはの世界ということになるのだろうか。全体的に家具が落ち着いた色合いなのに対して、棚の上にはかわいらしいぬいぐるみなどが大量に置かれていてどこかちぐはぐ。そのほとんどがもらいものなのだろうか、少し乱雑に扱われているように感じるのがつい笑いを誘う。

「あいつ露骨すぎるだろ……」

見比べてみるとその棚だけ明らかに他よりも埃を被っている。つまり、このスペースはいろはにとつて「どうでもいい場所」なのだろう。少しぬいぐるみたちが不憫に思える。後ついでにこれを送った男たちも、ついでね、ついで。

ぬいぐるみに付いた埃をはたき落して、掃除機で細かい埃も吸い取る。ぬいぐるみは特に埃を溜めこみやすいので、全て段ボールに詰めて蓋をして脇に置いておく。床に掃除機をかけて布団を干そうとして、ふと枕元に目があった。

「え……う？」

枕元の時計の隣あった小さな写真立て。シンプルなデザインのものには男女のツーショット写真が収まっていて、女の子の方はいろはだと認識できた。そのいろはとのツーショット、だから相手は葉山だと思つて最初は気にも留めなかった、留めなかったはずなのに、気がつくくと男の姿を認識していた。

少し猫背の姿勢にぼさぼさの黒髪、そして死んだような目。

それは紛れもなく俺だった。

背景を見るにコミュニティセンターの会議室で二人で書類に目を通しながら何か話しているようだ。そういえば、クリスマスイベントの時に書記の子が作業記録のために写真を撮っていたが、その時撮られたのか。まとめられた総括書類にこの写真はなかったから全く気付かなかった。

しかし、なぜそんな写真がこんなところにあるんだ……。

部屋を見渡す。机の隅に似たような写真立てがいくつか置いてあった。中学時代のものであろう写真、文化祭、体育祭の時の写真、サッカー部の集合写真。いくつも写真はあったが、その中にツーショット写真は一枚もなかった。おそらく、あの時、ディスプレイで撮ったであろう葉山とのものも。

どうして俺との写真だけが、しかも枕元に置いてあるのか。きつとなにかいろはなりの戦略があるのだと、例えば葉山が来た時に嫉妬させるようにとかそういうものがあるのだと思いを巡らせる。

しかし、思考をいくら巡らせても答えが出ない。八方塞がり、無限ループ、出口のない迷路だ。そもそも葉山を嫉妬させる目的なら葉山が来た時にだけ置いておけばいいし、あいつは見た目に反して身持ちが堅い。そこそこ交流のある同性の由比ヶ浜すら行ったことなかったこの家に葉山を招くとは思えない。

いや、本当は気づいているはずなのだ。これは迷路なんかじゃない、綱登りのステージを迷路だと自分に偽り続けているだけなのだ。

上を見上げれば出口への綱が簡単に目に入るのに、頑なに見ようとしない。ただ下を見つめて迷っている振りをしているだけ。滑稽で、狡猾で、残酷。

「俺は……俺は……」

けれどももう、ああもう逃げられないのだ。

俺は、もう顔をあげてしまったのだから。

* * *

割と遅い時間まで掃除がかかってしまったため夕食は外で済ませ、帰ってからシャワーを浴びてすぐにベッドにもぐりこんだ。昼間からずっと頭にまとわりついている靄は、シャワー程度ではぬぐえなかった。思考しては打ち消され思考しては打ち消され、打ち消された思考の破片が靄をより濃くする。

いつものように扉が開き、いろはが入ってくる。救済の時間、いや俺が勝手に救済だと思っていた時間が始まるのだ。

俺はいろはにとって頼れる兄貴、近くにおいて安心できる兄であろうとした。本物の兄

妹であろうとした。それが、いろはを救う方法だと信じて。だからいろはが俺を、比企谷八幡を好きという兄妹にあるまじき感情を持つていているという事実から目をそむけ、他の存在しない方法の代替として“救済”を受け入れていた。

しかし、いろはが俺に求めていたのは兄妹や家族とは違う、もつと別の大切なものだったのだ。だが俺の性格が、理性の化物なんていうふざけたものがそれを受け入れない。だから、いろはは俺と兄妹であろうとした。偽物でも、破綻しそうでも、俺との関係を壊さないために、本音を覆い隠して。破綻しそうな心を繋ぐために兄妹から逸脱した行為で自分を繋ぎとめて。

「お兄ちゃん……」

同じベッドにもぐりこみ、俺の背中に手を回して物欲しげに見つめてくる。その目の奥に“お兄ちゃん”ではなく“せんぱい”が見えてしまつて、胸が締め付けられるほど痛くなる。きつとこの痛みをいろははいつも抱いていたのだ。キスの後に見せていた、あの諦めたような笑みはそういうことだったのだから。

だから、そんな関係は、自分で自分を傷つける行為はやめさせねばならない。“お兄ちゃん”ではなく、比企谷八幡として、そうして弱つていくいろはから目は背けられない。

「いろは……」

「っ……」

名前を呼ぶとびくつと身体を震わせる。『救済』をするようになってから、一度も俺は最中に声を発することはなかった。俺の表情から何かを察したのか、いろはは逃げだそうとする。それを俺は腰に腕を巻きつけて離さない。今言わなければ、ちゃんと言わなければきつとこいつはいなくなる。だから、今ここで……。

「っ!？」

口を開こうとした時、ギツという小さな音に思わず振り向いた。

「あ……」

振り向いた先で、二つの目が、俺達を見ていた。

きつと比企谷兄妹は間違っていない

自分のお兄ちゃんへの気持ちに気づいてから、たぶん小町はそれをうまく隠し通せていると思う。そりゃあ、ちよつと胸のもやもやを抑えきれずにお兄ちゃんといスキンスリップを取ってしまったりすることはあるけど、あれ？ それって隠し通せてなくない？

いや、朴念仁のお兄ちゃんのことだからきつと気付いてない。たぶん受験終わってテシジョンあがってるとか思っている程度だろう。

そもそも小町とお兄ちゃんは血の繋がった兄弟なのだ。だからこんな感情を知られてしまったら、きつとお兄ちゃんに迷惑をかけるだけだ。戸惑わせてしまうだけだ。そのせいでお兄ちゃんと離れ離れになってしまうかもしれない。だから、今までこの想いに蓋をしていたんだ。

けど、そんなこと分かっているけど。

新しくできたお姉ちゃんが、いろはさんがお兄ちゃんと仲良くしているのを見ると、どうしても胸の奥がざわつくのを抑えられない。兄妹と言っても血は繋がっていないから結婚とかもできるんだよねーって考えたりすると……凄くずるい。妹みたいに甘

えて彼女にもなれるなんて……。

そうしてもやもやが溜まっていくと、日に日に寝付きが悪くなる。なんか初恋の男子中学生みたいなことしてゐるなって考えて、ちよつと笑つちやう。こんなに本気で恋をする初めての相手がお兄ちゃんなんて間違つてゐる。間違つてゐるけど、これが小町にある本物なんだ。

そんな日々が一週間くらい続いた。今日もなかなか寝付けない。一人でいると頭の中がお兄ちゃんのことですばいになつて、喉がからからになつたみたいに飢える。精神的な乾きは徐々に現実とリンクして実際に喉が渴いてきた。台所に行つて何か飲もう。

そう思つて部屋から出ようと扉を少し開けて、止まる。

お兄ちゃんの部屋に入つていく人影が見えた。薄暗い廊下に後を引くような亜麻色の髪。急速に鼓動が早まり、自分の気が動転しているのだと自覚する。勝手にお兄ちゃんの部屋に向く足を抑えられない。きつと今見たら戻れなくなる、壊れてしまふと分かっているはずなのに、謎の誘惑にあらがえない。一步、また一步部屋に近づく。

そしてお兄ちゃんの部屋の前で足は止まる。

過呼吸気味に荒くなる息を宥めて、震える手をドアノブにかける。今ならまだ戻れると警鐘を鳴らす思考を振り払つて、扉を開けた。

「あ……」

そこではお兄ちゃんといろはさんが抱き合っていて、お兄ちゃんは何か覚悟を決めたような表情をしていて……。

「……小町」

お兄ちゃんの声が聞こえるけど、認識できない。頭の中は真っ白。何も考えられなくて、怖くて悲しくて悔しくて切なくて……。

逃げだした。転びそうになりながら自分の部屋に逃げ込む。後ろからお兄ちゃんの声が聞こえたけど、止まらない。ベッドの上で布団を被る。今更になつて涙があふれてきて、嗚咽が止まらなくなる。ただただ辛いだけの涙はとめどなく溢れてきた。

「小町ちゃん……」

それくらい経つたのだろうか。少し涙が落ちついてきた時、いろはさんが部屋に入ってきた。かわいい人だと思う。きつと小町なんかじゃ太刀打ちできない。それが分かっているから、せめてお兄ちゃんにとって最高の妹であろうとしたのに……。

「ずるいよ、いろはさん……」

「……ごめんね。私が後から来たのに、お兄ちゃんを奪っちゃって……」

「そうじゃないよー」

ずるい。本当にずるい。小町はこんなに辛いのに、この胸はこんなに切なく苦しいのに。

「小町だってお兄ちゃんのこと、好きなのに！」

「っ!!」

妹という立場も、恋人という立場も取られたら、小町はどうやってお兄ちゃんと仲良くすればいいのだ。『お兄ちゃん』も『比企谷八幡』も両方とも小町から奪っちゃうなんて、ずるい……。

「そっか、やっぱりそうだったんだ……」

ぼしよりと何事かをつぶやくと、いろはさんは小町の正面に座って話してくれる。

家族のいなくなった自分にお兄ちゃんが居場所をくれたこと。いろはさんがお兄ちゃんがお兄ちゃんになるもつと前から好きだったこと。兄妹であろうとするお兄ちゃんともう恋人にはなれないと悟って、それでも自分の気持ちに抑えが効かなくて、それをお兄ちゃんが苦しみながらも癒そうとしてくれたこと。

苦しそうに、悲しそうに、いろはさんは話してくれた。

「それに……お兄ちゃんは、小町ちゃんをないがしろにする気なんて全然ないんだよ？」

「え……？」

悲しみの中に、どこか嬉しそうな色を混じらせて、いろはさんの話は再開される。

* * *

「小町!」

逃げ去る小町ちゃんを追いかけようとするお兄ちゃんの腕を、私は思わず掴んでしまった。いや、掴まなければいけないかった。

「いろは……?」

「私がいきます」

この現状を作り出した原因は私だ。私がいなければこんなことにはなっていないのだろう。だから、私が行かなきゃいけないんだ。

私の決意を察してくれたのか、お兄ちゃんは私の手を振り払おうと込めていた力を抜く。そして、近くにあつた鞆に手を伸ばすと、中から何かを取り出して、私によこしてきた。

「!..これ……」

それはお兄ちゃんと二人で写っている写真だった。クリスマスイベントのとき、書記の子にこっそり撮ってもらったものだった。ずっと枕元に置いて、毎日眺めていた大事な写真。

「悪い。今日、あの家の掃除をしていて、その、見ちゃった……」

バツが悪そうにお兄ちゃんを目をそらす。これが見られたということは、お兄ちゃんは気づいてしまったんだ。私がしていたことが、きつとお兄ちゃんは治療だとか救いだとかそういう意味だととらえて受け止めてくれていた行為が、ただただ私の本心から来るものだったということに。

「これを見たら……お兄ちゃんは私を受け入れてくれるんですか？」

私の問いにお兄ちゃんは一瞬奥歯を噛みしめて「いや」と答える。

「俺は、お前の気持ちも、小町の気持ちも……受け入れるわけにはいかない……」
「気づいてたんですね……」

「何年あいつのお兄ちゃんやってると思ってたんだ。ここ最近では明らかにおかしかったしな」

それはきつと小町ちゃんだから、裏を読む必要のない数少ない相手だからわかることなのだろう。裏を読む必要がないのだから、敏感で過敏なこの人は正確に汲みとるのだ。

それがちよつとうらやましく思う。

「俺は、俺が選んだせいで、誰かを一人になんてしたくない。大事なお前らとの関係を壊すのは、怖いんだ」

それは心から漏れだすような声。いままで選ぶ選択肢すらなかったお兄ちゃんは何かを選んで何かを捨てるといふ選択が怖いのだ。この人は優しいから、どうしようもなく優しく、臆病だから。だから、大事なものを一つでも失ってしまうのなら、自分を犠牲にしても答えを捻じ曲げてしまうのだ。

じゃあ、やっぱり私が動かなくちゃ。優しくして臆病なお兄ちゃんが自分を犠牲にしてしまう前に、私が動かなくちゃ。お兄ちゃんに別の選択肢を作ってあげなくちゃ。

だから私は全てを話し終えた後に、小町ちゃんに提案をする。

三つの選択肢で誰かが不幸になるのなら、誰かが孤独になるのなら。誰も傷つかないトウルールエンドを用意してあげるんだ。

* * *

いろはが小町の部屋に向かってだいぶ時間が経った。俺はベッドに座ってたただ天井を見上げている。

小町の気持ちには気づいていた。いろはの気持ちが本物だということも分かった。けど、いやだからこそ、二人の気持ちには答えられない。二人とも大事な妹だから、大

事な家族だから、片方を裏切ることなんてできない。

こんなことじゃ、葉山のことを馬鹿に出来ないな。俺にも選ぶことはできないんだから。

きつと今後俺達の関係は変質してしまうだろう。二人の気持ちに気づいてしまった俺自身が、なにより関係を保つことができないはずだから。

「それに耐えられないのなら……」

きつと俺と一緒にいたらあいつらは不幸になる。それに耐えられないのなら、ほかならぬ俺が辛いのなら。せめて、彼女たちに諦めのつく理由を与えてやるべきなのではないだろうか。俺のせいなのだから、俺が逃げだせば――

「俺がいなくなれば……」

「まあたゴミいちちゃんは馬鹿なこと考えてる」

二人の声に思考の海から引つ張り上げられる。いつの間にか二人は部屋に入ってきていて、二人ともいつものような呆れ顔をしていた。

「まあ、お兄ちゃんのことだから自分が私たちと会わないようにすればとか今頃考えてるんだらうなとは思いましたけどね」

「お兄ちゃんらしいけど、小町的にポイント低いよ」

クスクスと笑う二人に俺は付いていけない。きつきは小町の嗚咽がここまで聞こえ

ていただけに、なぜ二人がこんなに明るいのか理解ができなかった。困惑する俺をよそに妹たちはそれぞれ俺の横に座る。

「ね、お兄ちゃん。小町のこと、好き？」

「……ああ」

「私のことは好きですか？」

「……そうだな」

二人とも大事な妹で、魅力的な女性だ。きつと俺自身、兄妹愛の中に恋愛感情を抱いたこともあったのだろう。かわいくて兄思いの小町、あざとかわいくて真面目ないろは。それぞれに振り回されながらも、その生活を楽しんでいる自分が確かにいたのだ。だから、この二人を壊したくなかった。

「小町もね、お兄ちゃんが好き。お兄ちゃんとしても、異性としても好き」

「私も、お兄ちゃんが好きです。お兄ちゃんとして、せんぱいとして好きです」

けれど、関係は動きだしてしまった。動きだした歯車が俺に選択を迫る。どれかを捨てると急かしてくる。二人のどちらかを捨てなければならぬのなら、いつそ俺は――

「俺は……どちらかを選ぶなんて、できない……」

自分を捨てる。きつとこいつらからは責められるだろう、恨まれるだろう。それで

も、似た者同士のこの二人はきつとお互い支え合って行ける。絶対互いを見捨てたりしない。大丈夫、独りは慣れている。ぼっちは強い。負けることに関しては最強。だから、一人でも辛くはない。

だから、ここを去ろうと、ここからいなくなるうと立ち上がろうとして——両側から腕を引つ張られてベッドに倒された。

「え……？」

目の前にあるのはかわいい妹たちの呆れ顔。二人が俺の両の脚に体重をかけていて起き上がれない。

「まあ、〴〵どっちかを選べ〴〵ってことならお兄ちゃんが〴〵どちらも選ばずに離れる〴〵って選択肢を取ることは分かっちゃいましたからね」

「お兄ちゃん、小町達は一度も〴〵どっちかを選べ〴〵なんて言っていないよ」
「は？」

つい間拔けな声が出てしまい、二人にクスクス笑われる。

「お兄ちゃんはお小町もいろはさんも好きなんだよね？」

「あ、ああ」

「どっちかを選びたくはないんですよね？」

「そりゃあ……うん……」

「じゃあ、選ばなくていいんだよ！」

「うん……うん？」

選ばなくてもいい？ つまり、どっちも選べる……？ なにそれ、ちよつと八幡の常識外なんですけど。お月見山で化石を両方とももらえるみたいなの？ バグ？ いやいやいやいやいやいや。

「それは……普通に考えておかしいだろ」

明らかに普通じゃない。そんなのは間違っているはずだ。しかし、妹たちはまたクスクス笑う。

「普通じゃないお兄ちゃんがそんなこと言うの？」

「ん？ 否定できないけど、なんでここでけなされるの俺」

「ここ数十分の間に変化がありすぎて俺の高スペックブレインを用いても処理が追いつかない。えーと、つまり？」

「俺の選択肢は、どっちかを選ぶか、逃げるか、どっちも選ぶで？」

「うん。まあ逃げるなんて選んでも逃がさないけど」

何それ怖い。小町ちゃんいつの間にヤンデレ属性習得したの？

「で、お前ら的にはどっちも選ぶ推奨？」

「はい、さつき二人で話し合いました」

本人のいないところで妹ハーレムが承認されてて八幡驚きを禁じ得ない。

「じゃあ、俺は二人とも愛し続けていいの、か？」

聞くと、なんか二人とも顔を真っ赤にする。

「お、お兄ちゃん……」

「真顔で『愛し続ける』とか言うなんて、やっぱりお兄ちゃんあざといです……」

照れまくる二人を見ていと思うはず笑いが漏れてしまう。なんというか、悩んでいた自分が馬鹿馬鹿しい。俺がこんなにも悩んでいたのに、こいつらはずいぶん神経のずぶといことを考えたもんだ。

二人の腰に手を回して抱き寄せる。幸せそうに頬を緩める二人を見ると、胸が温かい気持ちでいっぱいになる。きっと俺は今、世界で一番の幸せ者に違いなかった。

「じゃあ、これからもよろしくな」

「うん！」

「はい！」

二人して頬にキスをしてくる。唇から伝わった熱はじんわりと広がっていく。

最初はなにも変えたくなかった。そのままの停滞を望んだ。次はどちらも傷つけなくなかった、独りにさせたくなかった。だから逃げようとした。けれど、変わってしまつた関係は誰も独りになる必要がなくて、きっとこれからも誰も独りにはならないと

いう確信を感じさせてくれた。

だから、俺達は三人で関係を進める。これから、ずっと。

・・*

「なんとも非常識な結末ね、シスコン谷優柔不断谷ハーレム谷君」

「わざわざ三つの蔑称をくつつける必要はあったんですかね……」

翌月曜日の放課後、俺は雪ノ下と由比ヶ浜から冷たい視線を向けられていた。というのも、部室に来たいろはが俺達三人の関係を嬉々として暴露したからである。いろはちゃんの口ゆるすぎるから今後秘密事は話さないようにしようしよう。

「はあ、まあ別に人の恋路に文句を言うほど無粋ではないから、とやかく言う気はないのだけど」

「牛に蹴られて死にたくないもんね」

「馬な」

まじで由比ヶ浜さんどうやってこの高校入ったの？ 実はうちの高校かなり入りや

すい説が浮上してきましたよ？

「恋愛をすれば、あなたの腐った目も根性も改善されるかもしれないから好きにすれば

いいわ。ただ……」

淡々と話していた雪ノ下がなにやら顔を赤くしてもじもじしだした。トイレだろうか、あまり我慢すると膀胱炎になってしまうので我慢はよくない。膀胱炎は痛みだけでなく発熱を起こしたりもするから注意が必要だぞ！　って言ったら怒られそうだから言わないけど。

「ただ、あまり人前でいちやつくのはやめてもらえないかしら……」

「何言ってるんだよ、俺がいちやつくわけないだろ」

「ないですよ！」

だつて俺だぞ俺。目立つことを嫌うぼっちオブぼっちの比企谷八幡が人前でいちやつくなんてそんなことするわけがないだろう。

「じゃあさ、さつきからずつというはちゃんかヒツキーに抱きついてるけど……」

「こんなの兄妹なら別に普通だろ」

「普通ですよ！」

いろはは部室に来てからずつと俺にあすなろ抱きをしてきていた。

「仲のいい兄妹はそうでしょうけど、あなたたちは恋人同士なのよね？」

「ああ、だがそれ以前に俺達は兄妹だ」

「ですよ！」

まったくこいつらは、俺達は大前提として兄妹なのである。だから兄妹らしいスキンシップを取ったところで何の問題もないのは自明の理であろう。雪ノ下よ、学年一位の頭脳が泣いているぞ。

「はあ、そこまで言うならもうとやかく言わないわ」

「ヒッキーキモい」

正論で論破したはずなのに、なぜか大人の対応をされたみたいと感じる。後ガハマさんは納得いかないからって俺を貶すのやめようね。あんまり人を貶すと語彙力のなさが露呈して馬鹿に見えるぞ？ あ、馬鹿だったわ。

その時、珍しく扉がノックされる。雪ノ下の「どうぞ」の後に扉が開かれると小町が入ってきた。

「どうも！ 小町、参上つかまつりました！」

そういうえば、今日は合格者女子の制服の採寸が行われてるんだっけか。小町の中学制服も久々に見たが、うん、やっぱりかわいいな。もうこれが見れないとなるとお兄ちゃんちよつと悲しい。

「こんにちは、小町さん」

「小町ちゃんやつはろー！」

「お二人ともどもです！ あ、おにーちゃん！」

小町は俺を見つけると前から抱きついてくる。前門の小町、後門のいろはの比企谷姉妹サンドである。なんなら中の具も比企谷。そういえば、今年のスカーレットサンドは誰だったんだろ。

「比企谷君……だから人前であまりいちやつかないでほしいんだけど……」

「だから誰がいついちやついてるんだよ」

「そうですよ!」

「まったくです!」

雪ノ下が「面倒くさい……」とつぶやきながら額に手を乗せている。頭痛だろうか、バファリン飲む?

兄妹であり恋人、きつとこれは普通じゃないし、間違っているのかもしれない。けれど、俺に抱きつきながらカラカラと笑う二人と見れば、少なくとも俺達の間ではこの選択は間違っていないのだと、そう思った。